

Title	男子学生における月経との関わりと月経観の形成
Author(s)	陸口, 雄斗; 三浦, 遥; 西村, 尋 他
Citation	未来共創. 2024, 11, p. 147-173
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/97814
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

男子学生における月経との関わりと月経観の形成

陸口雄斗 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程人間科学専攻グローバル共生学

三浦遥 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程人間科学専攻グローバル共生学

西村尋 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程人間科学専攻未来共生学

YUN YAJING 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程人間科学専攻教育環境学

宮本幸乃 大阪大学大学院人間科学研究科博士前期課程人間科学専攻社会環境学

要旨

本研究では、男性がこれまで経験してきた月経にまつわる体験談に着目し、ナラティブインタビューによって男性のどのような経験が、月経観の形成と関連しているのかを明らかにする。

調査結果では、男子学生たちは学校教育で月経の仕組みを学んだ一方で、パートナーという身近な女性と月経について話したり、実際にパートナーが月経を体験する様子を見聞したりするなかで、身体的・精神的な変化や不調の具体的な様子について理解を深めていく様子が分かった。また、自分自身が痛みやしんどさが経験できないからこそ、どういったサポートや声かけが適切なかが分からないという気持ちが読み取ることができた。

本研究では、男性大学生の「月経を理解したいが、理解しにくい教育カリキュラムとのギャップ」や「サポート、ケアしたい気持ちと苦痛を実体験できない葛藤」といった実態が明らかとなった。先行研究で示されてきた、男性が考える単なる月経への印象やイメージといった次元ではなく、月経教育を受ける環境、月経期間中の人との関係構築などの多次元で男子学生の月経観を捉えた。本研究によって、新たな男性の月経観を再定義するきっかけとなったといえる。

目次

- 1 研究背景
 - 1.1 高まる月経への関心とその性差
 - 1.2 研究目的
- 2 先行研究レビュー
 - 2.1 本研究における月経観の定義
 - 2.2 なぜ月経観を測るのか
 - 2.3 男性が教えられてきた月経知識とは
- 3 調査概要
- 4 結果
 - 4.1 学校での月経教育
 - 4.2 パートナーを通して体験する月経
 - 4.3 男子学生が知りたい月経へのケア
- 5 考察
 - 5.2 男子学生が知りたいこと
 - 5.3 情動に目を向けた性教育へ
- 6 結論

キーワード

男性の月経観、月経にまつわる経験、月経教育、ケア論

1. 研究背景

1.1 高まる月経への関心とその性差

近年、月経をめぐる社会的な関心が高まっている。2016年にイギリスのメディアが“period poverty”（生理の貧困）という言葉を用いたことをきっかけに、月経やそれをめぐる社会課題に世間の注目が集まるようになり、欧米を中心に生理用品に対する減税や無償提供といった社会運動が広まったほか、そうした流れを受けた日本でも2021年頃から生理の貧困が社会問題として顕在化してきた（杉田 2022）。それまでタブーとして扱われることが多かった月経が、社会問題の一つとしてスポットライトを当てられるようになったことは近年の大きな社会変化の一つと言えるのではないかと。

一方で、月経を抱える当事者である女性と月経を体験しない男性との間で、月経やそれをめぐる社会動向への関心の大きさに隔たりがあることは否定できないだろう。そもそも男性は月経に関する知識を十分に持っていないと指摘されている（石川・杉浦 2011）。男性の月経への無理解は、様々な形で顕在化する。例えば、東日本大震災で避難所での生活を体験した女性にインタビューを行った及川・常盤（2022）の調査では、災害発生時における避難所において、避難所の運営リーダーが男性であったためにその必要性が理解されず、ナプキンの入手に苦労するという体験が複数の女性から語られた。

アカデミアの世界においても月経は常に女性と共に語られてきたが男性とともに月経が議論されることはあまりなかった。数少ない事例のなかで、男性と月経が議論されてきた日本の先行研究としては、高校生男子が月経に対して持つイメージ、つまり月経観を測る研究や（猪瀬 2010; 白井ほか 2004）、男性が持つ月経の知識量が明らかにされてきた（石川・杉浦 2011）。以上の文献ではそれぞれの研究における問いとして、月経イメージを測り、男性が社会から求められる月経理解とのギャップ、いわゆる不足している知識や肯定的なイメージを究明することが挙げられている。つまり男性が十分な月経の知識や、肯定的な月経イメージを持っている状態が「月経理解ができてい」と見做されている。しかし男性がどういった経験から、肯定的な月経のイメージを抱くのか、またどのように月経の知識を得ているのか、といった月経観

の形成プロセスは議論されていない。

また、月経観や月経知識の計量フレームワークとして、しばしば散見されるのが、1980年代にJ Brooks-GunnとRuble（1980）によって開発されたMenstrual Attitude Questionnaire（以下、MAQ）や、MAQの質問項目や分析尺度を日本語に訳した野田（2003）の日本語版MAQである。このMAQでは月経に対してどのように考えているかを測定する尺度で、「衰弱」「厄介」「予測」「影響の否定」「自然」という因子が含まれている（Brooks-Gunn & Ruble 1980）。加えて月経に対するストレスの程度を測るMenstrual Distress Questionnaire（以下、MDQ）や、月経前症状の症状の程度をスクリーニングするPMDD評価尺度が多用されている（中村・福井 2001; 宮岡ほか 2009）。

以上のような研究はどれも、調査時点での月経観および月経の身体症状を量的に明らかにすることを目的としているため、月経観が形成されるプロセスの特性をみるという目標は達成できない。また現代の日本社会において目まぐるしく変化する社会側面に対応し、かつ急速に多様化する月経知識のニーズ（小塩 2022）は、あらかじめ設定された「尺度」では捉えることができない。よって本研究では、男性がこれまで経験してきた月経にまつわる体験談に着目し、ナラティブインタビューによって男性のこういった経験が、月経観の形成と関連しているのかを明らかにしていく。

1.2 研究目的

本研究では、男性が持つ月経観がどのような経験から形成されるのかを究明することを目的とする。また小目的として、男性が学びたかった月経の知識を明らかにし、男性にとって理解しやすい月経教育の在り方の基礎研究としたい。本研究を「男性と月経」というテーマの研究の一つとして位置づけ、男性と月経をめぐる社会的課題を探求するための一つの参考事例となることを目指す。

2. 先行研究レビュー

2.1 本研究における月経観の定義

はじめに、月経観とは月経の「何」を指しているのかについて、月経観に言及した文献を概観し整理していきたい。そもそも月経とは医学用語であり、「周期的に繰り返され、かつ限られた日数で自然に終わる子宮からの出血」(松本 2004: 88) と定義されている。また初めて月経が始まった日(初経)から月経が終わる日(閉経)まで、およそ35年から40年もの間、繰り返される(川瀬 1998)。そのため、周期性を持つ月経をいかに認識し、どのように付き合っていくかということは女性が生きていく上で置き去りにできない問題であるといえる(丸野 2016)。

月経観をめぐる議論は主に、医学、看護学、民族学、民俗学、家政学、フェミニズム研究、ジェンダー研究や発達心理学において行われてきた。医療領域においては身体機能としての月経に着目し、月経をどのようにイメージしているか(白井ほか 2004)、月経をどのように捉えているか(野田 2003)、といった思考や感情を計量的に調査し、月経をめぐる身体現象との関連性が検討されている。また社会学などにおいては、月経の意味や歴史・文化的背景に着目し、月経が社会のなかでどのように考えられ、受け止められてきたか(小野 2009)が議論されている。次に発達心理学においては、月経をどのように捉えるかを計量的に測り、母性の獲得や身体的な発達との関連性を検討する研究がなされてきた(丸野 2016)。

このように、月経観は多様な学問から議論、研究が行われている。また、月経観を「誰の視点」で捉えているのかも様々であり、年齢、性別、地域、国、文化、歴史と多くの議論がなされている。そのため、月経観は各々の分野や研究で定義づけられてきた。

しかし、男性の視点から月経観を議論してきた研究はほとんどない。学問によっては歴史的文化や慣習などの視点で捉えたものもあるが、多くの研究では女性へのインタビュー、つまり女性の経験を基にした議論が行われている。女性特有の身体現象であるからといっても、その女性と共存し、向き合ってきた男性の存在も視野に入れるべきである。

そこで本稿では、男性の視点で捉えた月経観に着目し、「男性が月経期間中の女性と共存してきた経験から、男性が月経をどのように捉えているのか」を月経観の定義として扱うこととする。

2.2 なぜ月経観を測るのか

先述した通り、月経観とは学問によって定義が曖昧であることから、「月経観」という言葉をつかわず「月経の捉え方、印象、月経に対する価値観」などと記述されている場合もある。なかでも医学や看護学では、月経観を測ることが試みられている。

例えば教育学者のBrooks-Gunnは、1980年に月経に対する印象や月経に対する態度を測定するための質問紙、MAQを開発した（Brooks-Gunn & Ruble 1980）。1970年来までの月経研究では、月経に対するイメージや行動、態度を否定的か肯定的かの一次元でしか評価されてこなかった（Levitt & Lubin 1967）。調査結果において、肯定的および否定的な因子が混在した結果が示された場合でも、否定的な因子の方に焦点が当たり、肯定的な因子が誘引する影響などは検討されていなかったという（Brooks-Gunn & Ruble 1980）。MAQの設問項目は（1）月経随伴症状に対する信念（原文ではBelief）、（2）月経との付き合い方、（3）月経期間中のパフォーマンスへの影響、（4）月経に対する一般的な評価といった4項目で構成されている。また設問の半数ずつが、一人称視点と三人称視点の複数の視点で設定されており、月経を経験しない男性や初経が来ていない女兒にも対応できる。同研究では一人称の「私（原文では"I"）」を「女性（原文では"women"）」に置き換えて男性からの回答を得ていた。

このMAQが開発されてからは、月経に対するストレス度を測るMDQ（中村・福井 1979）や、月経前症状の症状の程度を測るPMDD評価尺度（宮岡ほか 2009）と併用した研究が行われるようになった。

例えば、女子大学生の月経周辺期の変化、月経観、月経のセルフケア行動に関連する身体的、心理社会的要因を調査した野田（2003）は、月経痛と月経周辺期の変化が強いと月経観が否定的になり、否定的月経観が強く見られる場合は、月経痛と月経周辺期の変化が強くなるという双方の関係性を報告し

た。また月経をポジティブに捉えることで、月経随伴症状の軽減や(森 2004)、生活の質に影響がある、または日常的なストレスの解消や、規則的な生活リズムによって月経随伴症状が軽度になるとも報告された(松本 2004)。これらの研究報告から、月経は生活習慣やストレスなど毎日の生活とも密接に関連していると主張され(川瀬 1995)、月経は個人的な現象ではあるが、社会的な現象として女性のみならず男性からの理解の必要性が問われるようになった(丸野 2016)。

例えば、中高生男子の月経イメージを調査した猪瀬(2010)は、男性にとって月経が「妊娠・出産という生殖機能」に関連するものとして漠然と認識されていると報告した。同調査結果より、男子学生は女性の体のリズムや随伴症状など、関心を持って深く理解できていないと指摘されている(猪瀬 2010)。また、男性の月経前症候群や月経随伴症状の認知度の低さが多くの研究で指摘され(佐々木ほか 2005; ダルトン 2007; 志田・山口 2018)、男性による月経理解が強くと主張されるようになった(白井ほか 2004; 石川・杉浦 2011; 志田・山口 2018)。

しかし、男性が正しい月経知識を教えられることで、月経期間中の女性の理解や配慮がすぐにできるようにはならないのではないかと。男性がどういった経緯から、肯定的または否定的な月経観を持つようになったのか、といった月経観の形成プロセスを確認することが必要である。

また、これまでとり上げた先行研究は、男女両方の月経観や月経知識を同じ尺度で測定している。今では月経観尺度の礎になっているMAQやMDQは、男性でも回答ができるように工夫がされているが、あくまで設問項目の人称に客観性を含めているだけで、男性が持つ月経観は女性と同じ尺度では測りきれないといえる。なぜなら、男性は女性と比べて初めて月経教育を受ける時期が2年ほど遅く、授業内容が印象に残っていないと回答する男性も少なくない(猪瀬 2004)。また社会規範により、女性は「月経は隠すべきもの」という思考から、公の場で月経に関して話すことをタブー視していた背景もある(小野 2009: 154)。

よって本研究では、男性が月経教育を受けた経験や月経と関わった体験に着目し、その経験からどのように月経観が形成されたのかを究明していき

い。まずは、これまで男性がどのような月経の知識を学んできたかを、学校教育における月経教育の内容を基に確認していきたい。

2.3 男性が教えられてきた月経知識とは

日本における月経教育は性教育の一部とされてきた。性教育自体は、1992年の学習指導要領の改訂より理科と体育のなかに位置づけられ、担任教師や養護教諭等によって男女共修で教えられてきた(佐藤 2006)。それ以前の性教育は、授業のカリキュラムに組み込まれておらず、小学校の宿泊行事の前に高学年の女子生徒のみを集め、初経をどのように対処するかといった指導をする程度であった。男子生徒へは月経教育だけでなく、性教育そのものが行われていなかった(佐藤 2006)。一方で現在は、性教育が男女共修で教えられているが、あくまで性教育を教える保健体育教科が男女共修なだけで、月経や射精といった性教育の内容は、授業外または男女別の教室に分けられて教えられている(鈴木 2022)。

日本の小学校、中学校、高等学校の保健体育の学習指導要領と教科書の内容を分析した小塩(2022)の調査によると、小学校の第4学年、中学校の第1学年で月経について学ぶという。高校では指導する学年が定められていないが、学習指導要領に月経に関する記載があるため、学校によって指導するタイミングが異なるが教えられるという。また教育課程ごとに教えられる内容は、小学校4学年では(1)生理学的な知識の伝授、(2)悩みごとの相談先、(3)月経観の形成が教えられる。中学校1学年では、生理学的な知識が具体的に専門用語を用いて説明されているという。高校では、小学校および中学校の教科書と同様に、「性ホルモンの分泌が高まり、生殖器が発達する」ことや「初経時には、排卵や性周期が安定しないこと」が記述されているという。

高校生男女が学校教育で教わりたい月経の知識について調査した小塩(2022)は、女子学生たちはPMSや月経痛、月経異常、月経周期といった医学的な知識、また、低用量ピル、鎮痛剤、産婦人科への受診といった医学的な対処法について知りたいと報告した。また男子学生が知りたいのは、月経が起こる仕組みや月経周期、PMSについてなどの、より医学的な月経の知識に加え、配慮の仕方、生理用品の使用・廃棄方法などの月経期間中の行動面

だと報告している。小塩(2022)の調査結果から指摘ができるように、現在の学校教育における月経教育は、現代の学生が求めるニーズに適応できていないといえる。

また大学生男女の月経時のコミュニケーションの性差を明らかにした宮川・郡司(2019)は、学校教育における月経教育は科学的概念を促す役割を担っており、月経教育が「分かる」教育でなく「覚える」教育だと指摘している。

つまり、男子学生は学校教育で月経の知識を学ぶが、簡単な「月経」といった身体現象が教えられ、月経期間中の女性への配慮の仕方といった具体的で実践的な知識は学ばない。にもかかわらず、これまでの月経研究において男性の月経理解の不足が際立って指摘されてしまっている。そこで本研究では、男性が月経と関わった経験が月経観の形成にどう関連するのかを明らかにする。その関連性が、今後の月経教育の基礎研究の礎になることを期待したい。

3. 調査概要

本研究では、2022年12月から2023年1月にかけて男子学生10名に対してオンラインで半構造化インタビューを実施した。月経というトピックがプライベートな領域に関わるため、縁故法を用いて筆者らの知り合いを中心にインタビューーを選定した。インタビューーの属性とインタビューガイドは以下のとおりである(表1、2)。

インタビューの分析にはインビボ・コーディングを用いて、インタビューーによって語られた言葉のなかから男子学生たちの月経観やそれが形成されるプロセスを浮かび上がらせようと試みた。

なお本研究は、大阪大学人間科学研究科共生学系研究倫理委員会の承認(登録番号OUKS22056)、感染対応の承認(登録番号OUKSC2217OUKSC2217)を得て実施した。

4. 結果

本章では、半構造化インタビューで得たインタビューーの語りについて述

表1 インタビュー어의属性

インタビュー어	年齢	出身地	備考	インタビュー어
Aさん	20代	日本	大学院生	三浦
Bさん	20代	日本	看護学部生	三浦
Cさん	20代	日本	大学院生	陸口
Dさん	20代	日本	大学院生	陸口
Eさん	20代	日本	大学院生	宮本
Fさん	20代	中国	大学院生	YUN
Gさん	20代	中国	大学院生	YUN
Hさん	30代	ドイツ	大学院生	YUN
Iさん	20代	日本	非常勤の 高校教員	西村
Jさん	20代	日本	大学院生	西村

表2 インタビューガイド

インタビューガイド	
①	<u>身近な女性の存在の有無を確認するための質問</u> 「ご自身の身近な人で、日常的に会話をする女性はいますか。」
②	<u>これまでに月経に関する知識を得た経緯に関する質問</u> 「月経について、学校の授業や課外授業で教えてもらったことはありますか。」
③	<u>月経について学んだ内容に関する質問</u> 「どんな内容のことを学びましたか。」
④	<u>昨今の月経をめぐる社会的運動への関心の有無を確認するための質問</u> 「月経に対して行われている公的な施策について、知っていることはありますか。」
⑤	<u>そうした社会運動への印象に関する質問</u> 「その背景について、どんな印象を持っていますか。」
⑥	<u>月経をめぐる関心を抱いている事柄についての質問</u> 「月経に関して、どんな知識を知りたい（学びたい）と思いますか。」

べていきたい。まず4.1節では、インタビューたちが学校教育で受けた月経教育の経験を、次に4.2節では、学校教育以外で月経と関わった経験を示していく。男子学生による以上の2種類の経験が、どのような月経観の形成に繋がったのかを次章の考察で述べていく。

4.1 学校での月経教育

本節では、インタビューたちが学校教育のなかでどのような形で月経について教えられ、どんな内容を学んだのかについて述べていく¹。Dさんはインタビューガイドの二つ目の質問「月経について、学校の授業や課外授業で教えてもらったことはありますか。」という質問に対して、月経を学んだときの様子について以下のように振り返っていた。

4.1.1

「月経について…体育でやったね。」

>>>(質問者)「それはいつのとき？ 中学校？ 高校？ それとも小学校？」

「記憶に残っているのは高校よね。多分中学でもやってるんやろうけど、あんまり覚えてない。」

>>>(質問者)「あんまり覚えてない、なるほど。なんか、高校の時にどいう形式で授業やったとか、どんなこと学んだとか覚えてる？」

「すごい、仕組みは習ったよね。うん、なんかすごいさらっとやった記憶がある。」

>>>(質問者)「さらっと？」

「さらっと。多分、男性の先生からやったから喋りにくかったんかな、とはちょっと思ってた。」

>>>(質問者)「なるほどなるほど」

「うん、なんかすごくさらっと終わって。『あっ、流したなこの人』って思った記憶がある。[…] なんかいつもやったらすごい雑談をはさんでくる先生なんやけど、その時に限っては雑談も無ければ、生徒に問いかけることもなく。すーっと流したから、『ああ、流したんかな』って。」*D

引用部4.1.1でDさんは、月経について学んだこととして「仕組み」を挙げた。この、仕組みを学んだ、ということに関しては、AさんやBさんも言及しており、男子学生たちは月経教育の際に月経の仕組みなどの生物学的な知識について教えられたのだと読み取れる。

4.1.2

「仕組みみたいなのをなんか、教科書だったか、イラストで説明をされた。 […] 女性の体内図みたいなイラストを見せられて、なんか卵巣とかそういう仕組み。」*A

また4.1.1のなかでDさんは、月経について学んだタイミングについて高校生の頃は教わった記憶があるが、一方で中学校の頃に関しては「あまり覚えていない」と語った。月経の授業をめぐる記憶の曖昧さについては、ほかのインタビューからも多く述べられていた。

4.3

「覚えていないのですが、授業を受けた記憶はあります。」*F

4.4

「何か学んでた記憶はあるけれども、その何かを具体的に説明してくださいって言われたら、非常に難しいっていうぐらいの記憶です。」*E

こうした語りからは、男子学生たちの間で月経について授業のなかで学んだ知識があまり身についておらず、そもそも加えて授業を受けたこと自体あまり記憶されていないということが読み取れる。男子学生の知識不足が露呈した場面として、Cさんは以下の場面を想起した。

4.5

「多分中学校の保健体育とかで習ってたと思うけど、中学校のときは正直全然覚えてなくて。なんやったら女の子の友達が『お腹痛い』ってなって、

それを周りで囲んでたけど、なんか俺も月経やっていうのに気づかずに、『大丈夫なん？ 病気？』ってめっちゃきいちゃって、疎まれたっていう。[…]

>>>(質問者)「さっきの、疎まれたとき、中学時代のやつ。[…]そのとき、どういう状況だったか、もう一回改めて説明してもらってもいいですか。」
「なんか女の子が『お腹痛い！』って急になって、その周りをほかの女子が囲んで。「囲んで」って言っても2、3人くらいやけど。で、心配してて。急にそんなん言っ、おれは月経っていう知識がない状態っていうか、覚えてない状態やから、普通に病気やと思っちゃって。過剰に心配して、「保健室行ったほうがええんちゃう？」とか言ってるけど、そんなん分かってない男子に、中学の多感な時期に説明するのって、やっぱ向こうも恥ずかしいから。[…]『大丈夫やから、もう行って』みたいな感じが。[…]なんか、心配しただけなのに、ちょっとみんな怒ってるやん、っていうか。」

*C

中学生当時、月経について「覚えてない状態」だったCさんは、女子生徒の腹痛が月経痛だと気付かず、心配してしまったせいで、「ちょっとみんな怒ってるやん」という気持ちになったと話している。Cさんは年齢を重ねるにつれ月経について知るなかで「後々考えたら、それってそういうことかな、って」と、中学生当時のこの出来事を振り返ったと話していた。

学生が月経についてあまり覚えていなかった要因として考えられるものもインタビューのなかから浮かび上がってくる。例えば、Cさんは「中学高校のときもそうやけど、なかなか自分事じゃないから興味があんま湧かんかもしれんな」と語っており、男性であり月経を経験することがない自分にとって月経は「自分事」ではなく、興味を持たないと述べている。こうした、月経を直接体験しない男子学生側の関心の薄さも垣間見える一方で、男子学生が、月経について教える教員の月経を語ることを忌避するような態度を感じた場面もあった。Dさんは4.1.1のなかで、普段は雑談をはさみながら授業をする先生が月経について教えるときはそうした時間を設けることがなく、「さらっと」「流した」ような印象を受けたと語っている。

教員が月経について深く言及しない態度や、女友達の腹痛を心配する男子生徒があしらわれるような行動を受けた背景には、やはり月経について語ることをタブー視していることがあるだろう。これについてBさんも以下のように話していた。

4.6

「結構なんかタブーみたいなところが。その、月経について話題を出すのが、学校でも社会でもタブーみたいな印象を受けるので。」*B

学校教育のなかでいかにして月経が教えられてきたかについてインタビューの語りから分かったこととして、男子学生たちは主として月経の仕組みについて学んでいるが、あまり内容を覚えていないということがあるだろう。そしてその背景には、月経教育を担う先生側がそもそも月経についてあまり深く言及することはなく「さらっと」「流す」ように教えていたということが挙げられる。男子側の知識不足は、時に女子生徒との間でコミュニケーションの齟齬を生むことがあるという場面も、インタビューの話から伺えた。

また、月経をめぐる公的な施策について知っていることを尋ねた質問では、生理休暇や（回答者に人間科学研究科の学生が多かったため）MeWプロジェクトなどを回答する声があった。「フェムテック」や「生理の貧困」というワードに言及した人もいた一方で、そうした言葉について「聞いたことがない」と答える人もいた。

4.7

「生理休暇とかそういう形で、その、社会の制度として、女性の月経とか、女性特有の問題にも対処しようという動きは、ニュースとかで見たことがあります。」*A

4.8

「詳しくは知らないけれども、名前としてよく聞くのは、あのフェムテックとか。生理休暇っていう言葉があったりとかって言うその辺に関しては、あ、最近よく聞くっていう、印象があります。」*E

4.9

「生理用品を無料で提供するプロジェクトをしている研究室があるでしょう。」*F

4.10

>>> (質問者)「日本もいまフェムテックとかで普及してというか、ちょっとずつ注目されるようになってきたみたいなの。フェムテックは聞いたことある？」

「いや、知らんなあ。」*C

4.2 パートナーを通して体験する月経

インタビューのなかで浮かび上がってきたのは、インタビューに参加した男子学生の多くにとって、自身のパートナーが月経に関する情報源になっていたということであった。前節で、中学生時代の女子生徒からの冷たい反応を語ったCさんは、高校時代の学んだことに関して「多少、なんかまあそういうものがあるっていう。月一回、なんか血が出る日が、みたいなの。その程度。どうやらめっちゃ痛いらしい、とか。」と話していたが、これに続く場面では、大学入学後のパートナーとの会話のなかで新たに月経に関する知識を学んでいる様子が見えてくる。

4.2.1

>>> (質問者)「[高校の授業では] あんまりそれ以上深くは聞いてない、みたいなの？」

「そうですね。大学入って、なんか彼女とそういう話する、普通にするようになって、なんとなく。なんて言うん、『周期があって〜』とか。時期とか正直よく分からんけど、痛い時期、イライラする時期、とか。で、普通に過ごせる時期とか。あとに、人それぞれ痛みの度合いがあったりするとか。痛くはないけど、精神的なところの方がめっちゃ重いか。そういうのがより分かるようになったかな。」*C

この場面でCさんは、パートナーの会話のなかで月経について「より分かる

ようになる」プロセスについて話している。月経周期の話や、月経に関わる症状の個人差の話、身体的な痛みとは別の精神的なしんどさの存在など、さまざまなことをパートナーと直接話すことで、Cさんは月経についての理解を深めているのだった。パートナーとの会話のなかで月経について話したり知識を深めたりする様子は、Dさんの語りからも見られる。

4.2.2

「彼女とそういう話をするときがあるよね。[…]『今日生理の日で』という話とか、そこから『自分自身はそんなに重くないんだけどね』っていう話をしたりだとか、『でも重たい人がいて～』『こういう人がいて～』みたいな話をするときがある。」*D

パートナーとの会話だけでなく、男子学生たちはパートナーが月経を体験する様子を見たりパートナーと関わったりするなかでも月経についての理解を深めていた。

4.2.3

「月経とそれに伴う心身の変動みたいなのが毎月経験してるのは大変そうだろうと思いますし、それと同時に働いたりとかなんか学業やったりみたいな、並行してやらなければいけないっていう状況も大変そうだったて[パートナーを見て]思いました。」*A

4.2.4

「(前の彼女は)月経は気分の浮き沈みが激しかったりと、少しその、メンタル的な部分に関係してるのかなと思ってたんですけど、個人差があって。今の彼女は月経自体もまあ3日くらいで終わるっていうことで、僕が何かアプローチしたら『別にいい』って言われましたね。」*B

4.2.5

「やっぱ、機嫌悪くなるから、イライラしたり。やったら、その周期を把

握しときたいと思ってて。でも、その、周期を聞いたくらいで結構ずれることもあって、だから完璧に把握はしないけど、前回機嫌悪かった時期から大体一か月くらい経ったら『そろそろヤバいかなあ』みたいな、くらいのことを、それは勝手に思った。[...] なんかない不安定になることが多いと思うから、それを気にしとった。怒られたくないやん。結構その時ってさ、日頃思ってるんかもしれんけど、理不尽にキレられてる感じが男からしたらする。『男』っていうちょっと主語が大きいかもしれんけど、俺からしたらそういう気がして。[...] 逆にめっちゃ泣いてたりとか。だからなんか、やっぱ男女って違うんやなあっていう感じはしたな。」*C

Aさんは、パートナーが月経の症状を経験してる様子を見て「大変そうだろうな」と感じ、月経を抱えながら日常生活も並行して送らなければならない状況についても「大変そうだな」と感じており、パートナーの大変そうな様子から月経の諸症状や月経と社会生活との両立の困難さを意識していた。一方Bさんは(引用4.2.4)、以前のパートナーと現在のパートナーの様子を暗に比較することで月経の症状の個人差の存在を体験していた。またCさんは(引用4.2.5)パートナーが不機嫌になったり泣いたりする様子を見るほか、ときに「理不尽にキレられ」ることを通して自身も月経の症状に巻き込まれることにも言及していた。Cさんは、そうした「時期」が来ることを懸念し、前回不調だった時から「大体一か月くらい経ったら『そろそろヤバいかなあ』」と推測しており、パートナーの精神的不調を通して自身も月経周期があることを体験していた。

本節で取り上げた語りからは、男子学生たちは学校教育で月経の仕組みを学んだ一方で、パートナーという身近な女性と月経について話したり実際にパートナーが月経を体験する様子を見聞きしたりするなかで、身体的・精神的な変化や不調の具体的な様子について理解を深めていく様子が分かった。また月経の仕組みについては、学校で学習するような生物学的な用語とは別に、引用4.2.1にあった「痛い時期」「イライラする時期」「普通に過ごせる時期」のように、それぞれの周期の際の感情や感覚に基づいたパートナーによる名付けによって周期を理解することで、教科書的な理解とは別の方法で理解

を深めている様子も聞き取ることが出来た。さらに月経の個人差については、これまでのパートナーと現在のパートナーの月経時の様子を比較することを通して、男子学生が個人差の存在を直接体験している様子も語られた。

4.3 男子学生が知りたい月経へのケア

「月経についてどの様なことを知りたいか(学びたいか)」という質問に対して、月経期間中の女性に対する接し方やケアの方法について言及する意見がインタビューでは数多く聞けた。

4.3.1

「仕組みっていうよりも、その辛さとかどうしたら楽になるかとか。どういう、何だろう。もしその人が生理だったり、その、月経の特有の症状がある時にどうしてほしいのか？ みたいな。[...] そういう時に、どういう言葉をかけてあげたらいいのかな、とか。」*A

4.3.2

「それぞれどういうしんどさがあるのか、ってのは、もちろん個々それぞれだとは思いますが、具体的に、どういうしんどさがある、で、そのしんどさに対して、周りの人間が出来ることはなんなのか、っていうところは知りたい。もう一回学ぶ機会があるのであれば、それは凄く知っておきたいし、男性、女性って綺麗に分けちゃいけないけれども、一男性としてそれは知っておくべきだと思っている、っていう感じです。」*E

4.3.3

「月経とその不快感を和らげる方法についてですね。まあ、できることとできないこと、くらいでしょうか。ただ、どうケアすればいいのか、どうその不快感を少しでも和らげられるのか。」*G

目のまえの女性が抱える月経によるしんどさを解消するために、どのようなケアができるのか。どのようなサポートが自分にできるのか。そうしたケ

アの方法について回答する男子学生がインタビューのなかでは多かった。また、ここでとり上げた二つ目の語りの「一男性としてそれは知っておくべき」という言葉のように、自身のパートナーの有無を問わず、女性と関わる一人の人間として月経の症状やケアの方法について知っておくべきだとする意見も見られた。

ほかに男子学生の間では、ケアのような「したほうがよいこと」のほかに、「思い遣ってしないこと」について知りたいとする声もあった。

4.3.4

「例えば[パートナーと]どっか行く予定だったけど、それは行かないでのんびりした方が良かったのか、それともなんだろう、それはそのまま行って大丈夫なのかとかも、僕達だとよく分からないので、ま、そこがもっと分かるともっといいなって。対処というか、対応ができるのかなと思ってるので、そういうところは知りたいかなと思いますね。」*A

4.3.5

「一個人に限ったことと言えば、周期とかを、彼女とか[のを]把握したいっていう気もあるけど、それが女性側にとってどうなのか、っていうところが知りたい。聞いても大丈夫なんか。いや、大丈夫やねんけど、なんていうん、そういう、どこまでしていいかとか。例えばアプリでカップルで共有してたりとかもあると思うねんけど、それって一般的な感覚として、そういうのがやりたい人が多いんかな、っていうところで。」*C

Aさん(引用4.3.4)は月経に「対処」あるいは「対応」するために、どんなことをしても大丈夫なのかを知りたいという気持ちを話していた。Cさんの引用(4.3.5)についても、この場面の前に2節で取り上げた「周期を把握しときたい」と話した場面があったことを考えると、パートナーの月経やそれに伴う心身の不調に対応するために知識を得たいと考えていることが想像される。二人の語りからは、3節の冒頭で取り上げたような、周囲の女性をいたわるためにケアの方法が知りたいという気持ちとは別に、どのようにして月経に対応

すればよいのかが分からないからその方法が知りたいという気持ちがうかがえる。

他方、男子学生たちからは、パートナーへのケアとして自分にできることや声かけのほかに、医学的な処置について知りたいとする声もあった。

4.3.6

「(ピルの)副作用とかの知識と避妊薬の知識が男でもあった方がいいので、どういう利点、欠点があるのか、女性だけじゃなくて、男も一般的に知ったほうがいいので、まあ僕も知りたいと思います。」*H

4.3.7

[月経について知りたいことを問われて]「症状の重い軽いつてであると思うけど、軽くする薬とかも多少あるやん。完璧なやつはないかもしれんけど、多少軽減するっていう。そういうのって使ったほうがいいのかな、っていう。[...] 痛み止めもそうやし、低用量ピルみたいなものってやったほうがええんかかっていう。それが血栓症を起こすリスクがあるっていうのを聞いたことがあって。血栓症ってめっちゃ怖いやん、と思って。血管つまったらヤバイやん。」*C

この二人のインタビューイの発言では、低用量ピルや痛み止めのような医学的な処置についてその効果とリスクについて知りたいとする意見が上がった。

これまで第3節のなかで引用したインタビューデータのなかでは、月経についてさらに知りたい理由として、「しんどさ」「辛さ」を和らげたいという心配の気持ち(引用4.3.3など)や、月経に対処したいという気持ち(引用4.3.4など)が上がったのに加え、「一男性としてそれは知っておくべき」「男も一般的に知ったほうがいい」というような男性が月経について知ることを求められる社会通念をその原因として述べる人もいた(引用4.3.2、4.3.5)。他にもDさんは月経について知りたい理由として以下のような発言をしていた。

4.3.8

「なんだろうな、パートナーの暮らしって言うところで言ったら、それは学びたいというか、分かるところは分かりたい。どうしてもさ、経験が出来ないわけじゃん。だから限界はあるんだけど、こう、少しでも分かるというか、寄り添えるというか、想像できるためにも学びたいっていうのはあるかな。知りたいというか。[…] これは本当仮定やけど、学校の教員になったりして、月経っていうのがあるわけじゃない。それこそ、部活どうすんの、って話とか。授業に気持ちのらねえっていうのもあると思うし。それを、面と向かって『月経だから』って話にするわけじゃないけど、それを想像できるっていうのは、一つ教員としては必要なことなのかなとは思って。[…] その一つの、なんていうかな、軸というか、一つの見る視点として月経というものを知っておくっていうのは、引き出しに入れておくっていうのは、必要な、と。」*D

Dさんは、パートナーのことをより深く理解し寄り添うために、月経についてもっと知りたいと考えていた。さらに、将来教員になることを志望しているDさんは、女子生徒のことを理解するためにも月経という「軸」を持つておくことが教員として必要であると考えていると話していた。ここから、身近に関わる女性について理解するために、自らが体験しえない月経について学ぶことが重要であると考えているDさんの思考が読み取れるだろう。

インタビューのなかで男子学生たちは、月経について知りたいこととして月経を経験する女性へのケアについて言及することが多かった。自分自身が痛みやしんどさが経験できないからこそ、どういったサポートや声かけが適切なのが分からないという気持ちがここから読み取れるだろう。また本人へのケア以外でも、月経期間中の女性に対応する方法や月経のしんどさに対する医学的な処置について知りたいという考えも聞いた。月経について学習したいと思う理由としては、女性を心配する気持ちや理解したいという気持ち、さらには一人の男性として知るべきだという世間的な要求に応じようとする態度が見られた。

5. 考察

本章では、第4章で述べたインタビューデータを基に、男子学生のどのような月経の経験がどのような月経観を形成したのかを考察していく。またインタビューでは、男子学生に学校教育で受けた月経教育について尋ねた。男子学生が当時の経験を振り返り、現在どのような知識や情報を教えてほしいのか、整理し述べていきたい。

5.1 月経観が形成される二つのルート

今回のインタビューに参加したインタビュー어의語りからは、男性が月経に関する知識や印象を形成するプロセスとして、二つの道のりがあることが明らかになった。

一つは、学校のなかで行われる月経教育（性教育）であった。月経については主として保健体育の授業のなかで教えられ、内容としては月経がどうやって起こるのかという「仕組み」といった医学・自然科学的な内容を教えられたとするインタビューの声が多く、学校で学んだ月経の仕組みなどについて記憶しているインタビューは少なかった。また、例えば普段はよく雑談をはさむ先生が月経に関してはプリントの読み上げだけで終わり流したような様子だった、ということが語られたように、月経について教える先生の側は月経について深く話すことを避けているような印象を男子生徒に与えていた。

月経教育（性教育）の不十分さについては、宮川・郡司（2019）などで指摘されていたが、今回の調査では、そうした不十分な月経教育から男子学生たちが受けた具体的な印象が明らかになった。男子学生たちは、月経教育を担当する教員から、月経について深く言及することをはばかれるような態度を感じており、結果として多くの男子学生は月経に関する知識のことをあまり覚えていないというのが現状であった。

学校教育の場以外に、月経観を形成するもう一つの要素として浮かび上がってきたのは、恋人・パートナーをはじめとする男子学生たちにとっての身近な女性の存在であった。自分の体で月経を体験することが出来ない男子学生たちは、身近な所で女性が月経を経験する様子を見聞きすること通して間接

的に月経を体験する。月経の前後で女性が、月経痛の痛みのような身体面での不調やホルモンバランスの乱れが引き起こす精神面での不調に苦しむ様子を間近で見たり、ときには、予定の変更や「怒り」「イライラ」といった普段とは異なる相手からの感情表現に“巻き込まれる”ことを通して、男子学生たちは、女性が月経によって心身の状態が変化していることを感じ取り、相手のことを心配したり体調に対して不安を抱く様子がインタビューデータからは明らかになった。また、身近な女性と月経によって引き起こされる症状の様子（どんな風に痛むのか、といったこと）や症状の個人差の存在について話すことから、男子学生はより立体的に月経について理解することになっていた。教科書的な内容では実際にどのような痛みがあるのか想像することは難しいが、男子学生は女性から発せられる具体的な語りから痛みを想像することができるようになるのだった。

加えてインタビューデータからは、学校で学んだ知識を、女性の語りから学校教育とは別の仕方でも新たに学び直す様子も見られた。「排卵期」や「黄体期」といった生物学の用語は、パートナーの言葉によって「痛い時期」「イライラする時期」「普通に過ごせる時期」などのように感覚や感情と紐づいた言葉に変換され、男子学生はそうした「痛い時期」や「イライラする時期」にどのような対処をすればよいのか考えることで、感覚から月経を理解しようと試みていた。このように、学校教育と身近な女性との関わり合いという二つの方法から、男子学生たちは自身の月経観を形成していた。

5.2 男子学生が知りたいこと

このようにして形成された月経観を持つ男子学生たちにとって、月経に関して知りたかったことは、その多くが、月経を抱える身近な女性たちをどのようにケアすればよいのか、ということであった。痛みを抑えたり不快感を和らげたりするには自分たちに何ができるのか。低用量ピルは月経痛を抑えることが出来ると聞かすが、副作用などはないのだろうか。イライラする時期は、どんな風に接すればよいのだろうか。そのような具体的なケアのやり方について知りたいと話す男子学生たちの発言は、インタビューのなかで数多く見られた。その背景には、自らがその苦しみを体験することができないからこそ、

相手がどんなケアをされたら痛みが和らぐのかが全く分からない、ということが考えられる。しかしながら、これまでの学校教育は、月経に関して医学・生物学的な知識を教えるにとどまっており、そこでどんなケアが求められるのかということについて男子生徒たちが考える機会は与えられなかった。

5.3 情動に目を向けた性教育へ

月経の「痛み」や「しんどさ」のような情動的な要素は学校教育のなかでは排除されてきた。より正確に言えば、「月経痛」の存在については言及されたとしても、実際にどんな具合で痛みが生じるのか、どういった辛さがあるのかといった声が男子生徒のもとに届けられることはほとんどなかった。ここには、月経をタブー視する文化的な問題や、月経の話題を他の人に明かさないという個人化の問題が背景にあるだろう。結果として、月経に関して教科書的な知識を得ることしかできない男性と実際に月経でさまざまな辛さを抱える女性との間で、形成される月経観は全く異なったものになってしまうのだろうと考えられる。

6. 結論

本研究では、男子学生の月経との関わった経験が、どのような月経観を形成するのかといったプロセスを調査した。

調査結果では、男子学生は学校教育で学んだ「月経の仕組み」や「生物学的な知識」は明確に覚えておらず、身についていないと話した。その理由として、月経を直接体験しない男子学生側の関心の薄さも垣間見える一方で、月経教育を担う教員側がそもそも月経についてあまり深く言及することはなく「さらっと」「流す」ように教えていた。そういった月経教育の教授知識の浅さや教員の態度を受けて、男子学生は月経理解を深めることが難しい。そもそも、男子学生が月経理解を深めたいと考える環境が整備されていない。

そんな学習環境のなかでも、教育課程を終えた男子学生は「月経教育を受けてきた」と見做されてしまう。また月経期間中の女子学生や女性と関わった際に、女性や社会が求める「月経理解」を手探りで学ぶこととなる。パートナー

をサポートしたい気持ちに反して、自分自身が痛みやしんどさが経験できないからこそ、どういったサポートや声かけが適切なのか分からないという葛藤が生じていた。さらには、一人の男性として知るべきだという世間的な要求に応じようとする態度が見られた。

よって本研究では、男性大学生の「月経を理解したいが、理解しにくい教育カリキュラムとのギャップ」や「サポート、ケアしたい気持ちと苦痛を実体験できない葛藤」といった実態が明らかとなった。先行研究で示されてきた、男性が考える単なる月経への印象やイメージといった一次元ではなく、月経教育を受ける環境、月経期間中の人との関係構築などの多次元で男子学生の月経観を捉えることができた。

この研究結果より、月経を経験し得ない男性は、パートナーや姉妹兄弟の有無や、教育環境など様々な要因が影響する分、女性と比べて自身の月経観を確立することが難しいといえる。したがって、現代社会における月経をめぐる課題は、女性が抱える困難さばかりが注視されているが、男性が抱える困難さにもフォーカスが当たるべきである。月経教育および月経研究において、これまで議論されてきた男性の存在を再定義する必要があるのではないだろうか。

注

- 1 本稿では、調査に協力して下さったインタビュー어를形式的にアルファベットで表現する。引用部末尾のアルファベットはインタビュー어의識別コードとなっている。

参考文献

石川康代・杉浦絹子

- 2011 「男性のもつ月経観と月経に関する知識の現状—男子大学生および既婚男性への調査—」『母性衛生』52(2): 237-248。

猪瀬優理

- 2010 「中学生・高校生の月経観・射精観とその文化的背景」『現代社会学研究』23: 1-18。

及川裕子・常盤洋子

- 2022 「災害時の避難所におけるウィメンズヘルスの課題—東日本大震災の避難所を経験

した成熟期女性の語りから—』『日健医誌』31(3): 369-379。

小野千佐子

2009 「布ナプキンを通じた月経観の変容に関する研究—『存在する月経』への選択肢を求めて—』『同志社政策科学研究』11(2): 149-162。

川瀬良美

1998 「人間発達における女性の性質：思春期と月経」『淑徳大学社会学部研究紀要』32:17-32。

キャサリーナ・ダルトン

2007 『PMSバイブル—月経前症候群のすべて—』東京：学樹書院。

小塩若菜

2022 「高校生の月経対処からみる日本の月経教育の課題—大阪の教師と生徒の語りから—」『大阪大学大学院人間科学研究科2022年度修士論文』、大阪、pp. 32-83。

佐々木梢・伊藤祥子・坂口けさみら

2005 「大学1、2年生の月経に関する現状—大学1、2年生のアンケート調査から—」『日本看護学会論文集母性看護』36: 137-139。

佐藤年明

2006 「思春期の性教育における男女別学習と男女合同学習の意味—日本とスウェーデンの実践事例において」『三重大学教育学部研究紀要』57:171-183。

志田佑佳子・山口典子

2018 「大学生男子の月経前症候群に関する認識の実態調査」『新潟医療福祉学会誌』18(1): 78-78。

白井瑞子・内藤直子・益岡享代・真鍋由紀子・山本文子

2004 「高校生<男女>の月経イメージ—初めての月経教育—の月経観、月経痛との関連—」『母性衛生』458 87-97。

杉田映理

2022 「序論 欧米や日本でも社会問題化する月経」杉田映理・新本万里子編『月経の人類学』pp. 6-8、京都：世界思想社。

鈴木幸子

2022 「日本の月経教育と女子中学生の月経事情」杉田映理・新本万里子編『月経の人類学—女子生徒の「生理」と開発支援』pp.243-262、京都：世界思想社。

中村美和子・福井里美

2001 「月経随伴症状日本語版 (MDQ: Menstrual Distress Questionnaire)」堀洋道監修、松井豊編『心理測定尺度集 III —心の健康をはかる<適応・臨床>』pp. 272-277、東京：サイエンス社。

野田洋子

2003 「女子学生の月経の経験第2報月経の経験の関連要因」『日本女性心身医学会雑誌』8(1): 64-78。

松本清一

2004 『月経らしくらく講座—もっと上手に付き合い、素敵に生きるために—』東京:文光堂。

丸野佳乃子

2016 「臨床心理学における月経研究の展望」『九州大学心理学研究』17:29-33。

宮岡佳子、秋元世志枝、上田嘉代子、加茂 登志子

2009 「PMDD評価尺度の妥当性および信頼性の検討」『日本女性心身医学会雑誌』14: 194-201。

宮川亜実、郡司菜津美

2019 「月経時における男女のコミュニケーションについて—男子大学生と女子大学生の性差から—」『横浜国立大学教育学会研究論集』6:1-11。

森和代

2004 「大学生における月経イメージについて」『桜美林論集』(31) : 153-161。

Brooks-Gunn Jeanne and Ruble N. Diane

1980 The Menstrual Attitude Questionnaire. *Psychosomatic Medicine* 42(5): 503-512.

Levitt, E. E. & Lubin, B.

1967 Some personality factors associated with menstrual complaints and menstrual attitude. *Journal of Psychosomatic Research*. 11(3):267-270.

The relationship between the process of menstrual attitude formation and male student's menstrual experience

Yuto MUGUCHI, Haruka MIURA, Jin NISHIMURA,
Yajng YUN, Yukino MIYAMOTO

Abstract

This study aims to explore male students' experiences and attitudes towards menstruation. Through narrative interviews, we pay attention to what they talk about menstruation and try to find how their view of menstruation has formed.

In their narratives, male students learned only about the menstrual system and the fact that physical and emotional changes happen during the period in the school curriculum. However, they have forgotten much of what they studied in the school.

Beyond the classrooms, male students have learned how female feel during the period and what menstruation causes for them by observing and listening to the struggles and difficulties they have, especially their partners and family members. Some male students indirectly experience menstruation by talking about the pain and trying to care for women. On the other hand, they seem uncertain and concerned about how they care for women because they never experience directly the pain or emotional changes associated with menstruation and they are not sure that what kind of support and encouragement would be appropriate for women they are close to.

This study also revealed the gaps between the educational curriculum, which tells only about the biological system of menstruation, and male students' desire to know various aspects of menstruation including experiences of the pain and emotional changes females have.

This research result shows male students' have construct their experiences and attitudes towards menstruation not only by school curriculums but also physical care and affective support for female. This study will provide an opportunity to reconsider a male view of menstruation and menstrual education.

Keywords : male's menstrual attitude, menstrual experiences, menstrual education, concept of care/ caring
